

2023. 4. 16. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書19章28～36節
『あなたが必要なのです』

「エルサレムに迎えらるる」という小標題が掲げられています。エルサレム入城の記事は、他の福音書も押し並べて記事にしていますが、ルカは群衆に迎え入れられるイエスの姿を描かず、出来る限り華やかさを抑えて弟子たちだけに迎えらるるイエスに留めています(36節の「人々」は誤訳)。ここには、裏切られて殺されるという受難予告通りに歩みを進めるルカによるイエス理解があります。

そもそもエルサレム入城とは、戦に勝った兵士たちが正門から威風堂々と馬にまたがり群衆の歓呼に迎えられたという出来事につきます。これはいつの時代、どこの国でも共通した歴史なのかと思います。有名なところでは、パリの凱旋門などが思い浮かびます。それではなぜ兵士でもないイエスの入城がこのような舞台装置で描き出されなければならなかったのでしょうか。それも兵士は戦で勝ったという宣言のゆえに入城したのです。イエスは誰かに勝ったなどということはもちろんありません。よしんば「死に打ち勝たれた」といっても十字架はまだ先の話です。そんなイエスに、ルカは駿馬などを与えず、それとは程遠いロバの子を与えて入城の姿を記しました。

実は、この箇所は旧約聖書のゼカリヤ書9章9節にあります「高ぶることなく、ろばに乗ってくる」という故事にちなんでおります。がっしりした体躯のアラブ系の軍馬なんかではなく、ロバにしか過ぎない存在、それも子ロバであったといますし、尚かつレンタル・ロバ、つまり借り物であったと福音書記者たちは等しく記します。

当時、中近東ではロバは一般的に荷物運搬用でした。人がその背に乗ることがあるとするならば、障がいを持つ人や急病の人くらいしかなかったといえます。ましてや子ロバに乗るなどという行為は皆無だったことでしょう。

ここで描かれるのは、この世の価値観の180度の転換でもあるのです。一言で言い表すならば、福音の質の宣言、つまり従来の人間理解の脱却が宣べら

れてゆくのです。初代教会は、ロバになぞらえて、自力で歩くことの出来ない人、自力で生きる事の出来ない人を受け入れて共に助け合いつつ歩んでいこうという決断と行為という日常の営みこそがイエスの福音であり、愛であると宣言したのです。

わたしたちは、愛することは与えることであるということを知っています。さらに、富む者がそうでない者に何かを与えることがその意味ではないこともよく知っています。それは与えることによって、初めて自らが癒されるような渴きをこころの内に見出すことなのです。与えてこころの渴きを癒す。それを愛というのです。

愛の問題とは、愛する対象の問題でも、愛の結果の問題でもありません。そうではなく、わたしのこころは何に渴いているのかという問題なのです。与えることによってのみ癒されるような渴きをこころに抱いているか否かの問題なのです。そういう渴きのないところの与えは愛ではないのです。

「主がお入り用なのです」(31・34)とルカは二回も記します。これは「今、この時、あなたが必要なのです」という迫りなのです。持ち主たちはこのちっぽけなロバの子の与えを通して自らの渴きの大きな癒しを得たのではなかったでしょうか。